

と畜検査でみられた放線菌症様疾病の2例

食肉衛生検査所
中山智之、松原和江、林 和史

〔はじめに〕と畜検査において放線菌症様疾病を2例発見したので、報告する。

〔症例1〕

1. 動物名：牛、 品種：交雑種、 性別：去勢、 月齢：27ヵ月齢
2. 検体採取日：H21年(2009)年11月17日
3. 生体所見：一般畜として搬入され、特に著変は認めなかった。
4. 肉眼所見：肺に病変を認めた(写真1)。病変部は、退色し、小豆大の硬丘の集合を形成していた。
 剖面は硬く、黄色砂粒様物の小塊を多数認めた(写真2、3)。



写真1 肺 外観



写真2 肺の剖面および
黄色砂粒様物



写真3 肺の剖面および
黄色砂粒様物

5. 組織所見：病変部は、肺胞構造は失われ、多層の結合組織により他と分画されていた(写真4)。
 分画された領域内は、さらに類上皮細胞により不正型に分画され、その内部にエオジン好性を示す壊死・崩壊した好中球の集簇巣(膿瘍)を島状に多数認めた。(写真4、5)。

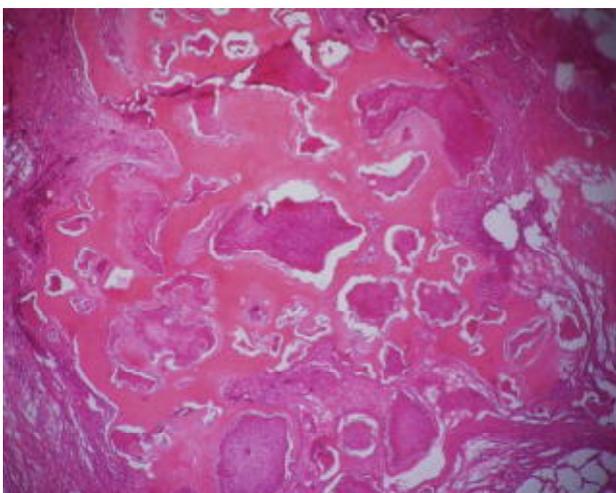


写真4 病変部 HE × 40

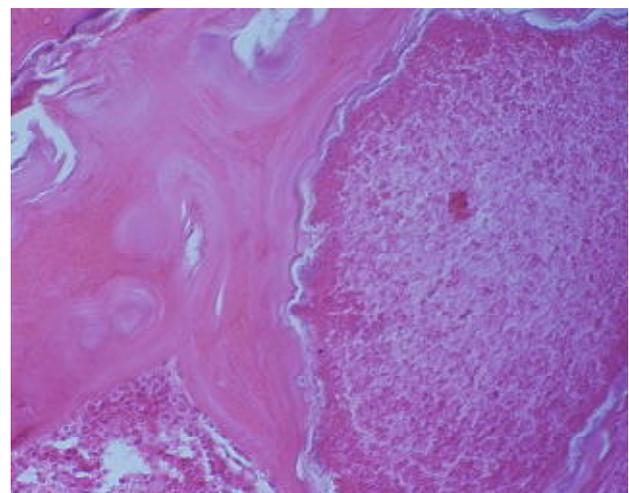


写真5 類上皮細胞(左)と壊死・崩壊した
好中球の集簇巣(膿瘍・右) HE × 200

膿瘍の中には硫黄様顆粒を認めた。当該顆粒は塩基性に染まる中心部とその外側を放射状に配列する細胞から成っていた(写真6、7)

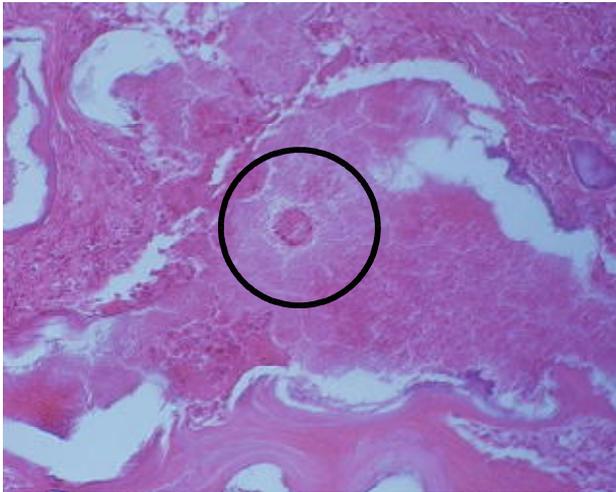


写真6 硫黄様顆粒 HE × 400

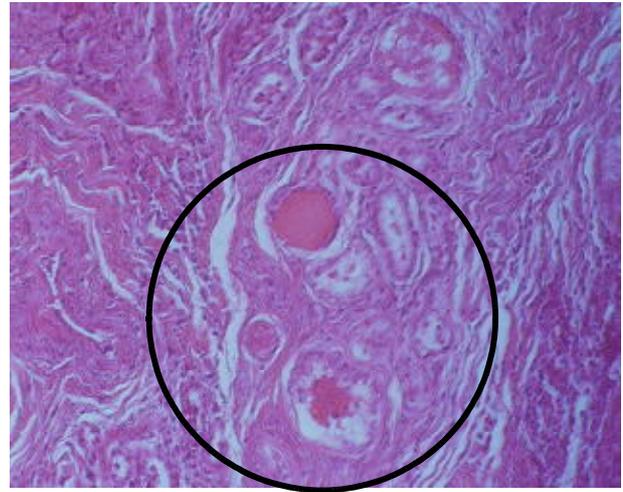


写真7 硫黄様顆粒 HE × 400

- 6. 行政措置：肺の全部廃棄
- 7. 診断名：牛の放線菌症様疾病

〔症例2〕

- 1. 動物名：牛、 品種：黒毛和種、 性別：去勢、 月齢：30ヵ月齢
- 2. 検体採取日：H22年(2010)年1月15日
- 3. 生体所見：一般畜として搬入され、特に著変は認めなかった。
- 4. 肉眼所見：舌の筋肉内および脂肪内に直径3～8mmの淡赤色または淡黄色を呈する硬結粒を20数個認めた(写真8)。そのうち10数個は舌表面被膜下に存在し、外部から触知可能で(写真9)、他は、筋肉内または脂肪内に内在していた(写真10)。



写真8 舌全景



写真9
触知可能な
硬結粒



写真10
舌筋肉内に
内在する硬
結粒

5. 組織所見

舌筋内の腫瘍（写真 11）は、外層から筋肉、結合組織、空胞変性細胞（写真 12）により形成され、その内部に硫黄粒様物（写真 13 ~ 15）およびエオジン好性細胞の集簇（写真 16）を認めた。

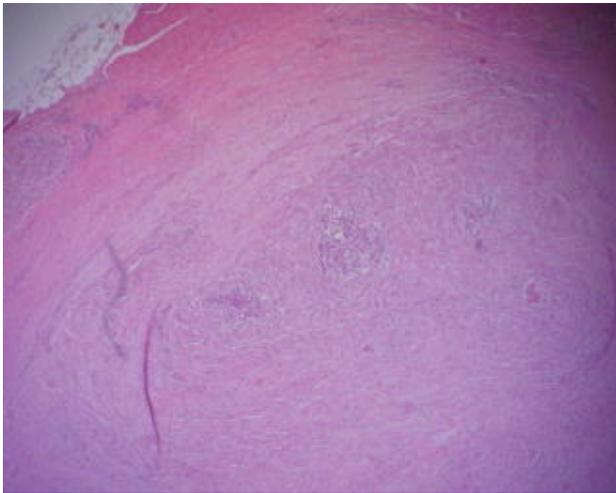


写真 11 腫瘍 HE × 40

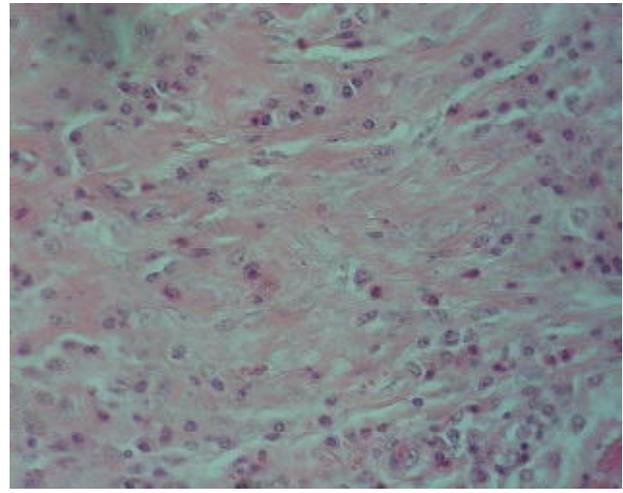


写真 12 空胞変性細胞 HE × 400

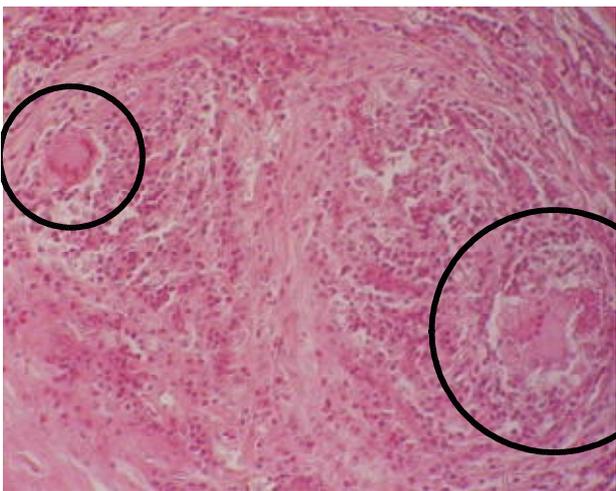


写真 13 舌筋内硫黄様顆粒 HE × 200

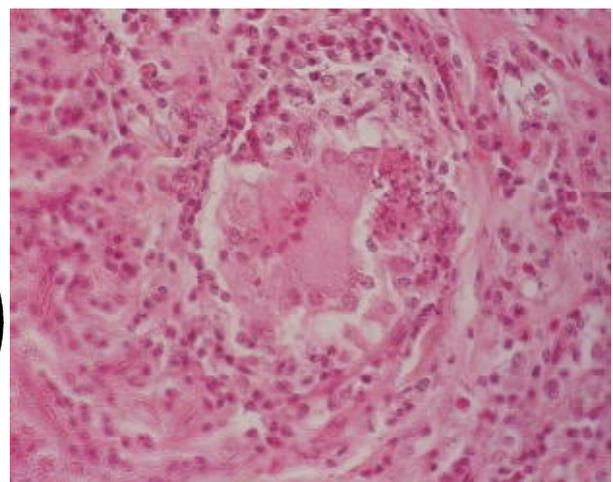


写真 14 舌筋内硫黄様顆粒 HE × 400

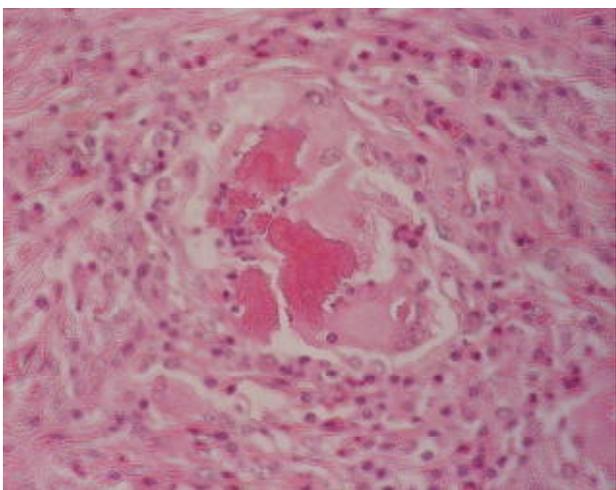


写真 15 舌筋内硫黄様顆粒 HE × 400

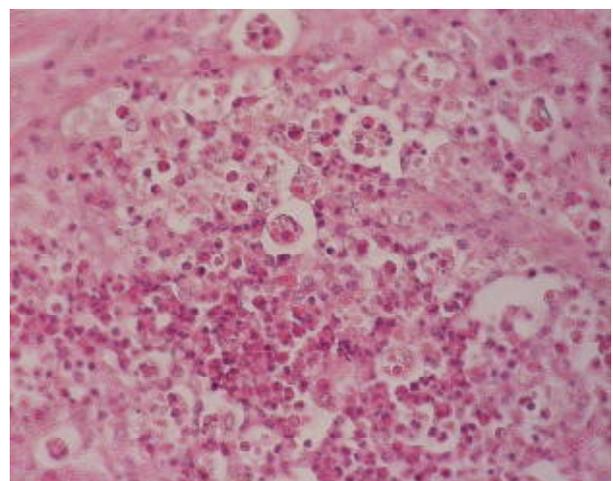


写真 16 エオジン好性細胞の集簇 HE × 400

6 . 行政措置：舌の全部廃棄

7 . 診断名：牛の放線菌症様疾病

〔考察〕 広義の牛の放線菌症は、*Actinomyces bovis* による Actinomycosis (狭義の放線菌症) と *Actinobacillus lignieresii* による Actinobacillosis (アクチノバチルス症) に分けられるが、その他ブドウ球菌や化膿桿菌などによっても生じるとされている。今回報告した2例の症状は、放線菌症の症状に類似していた。その好発部位である肺や舌に病変を認めたこと、硫黄顆粒を形成する型があること、結合組織性の小結節を形成する型があることなどである。しかし、原因菌の同定はできなかった。よって、診断名を牛の放線菌症様疾病とした。

文献によると、アクチノバチルス症が形成する硫黄顆粒の組織像は、「硫黄顆粒は中心に菌塊 (HE 染色では薄く塩基性に染まる部分としか見えない) と放射線状に配列する棍棒体から成る。」となっている。本症例で示した硫黄様顆粒に類似している。

アクチノバチルス症は、と畜場において散発的に見られるもので、化膿性肉芽腫性炎を起こす慢性疾病として知られている。本病は、主に舌、頭・頸部リンパ節、肺などの軟部組織が侵され、その中でも特に腫脹し硬くなった舌を「木舌」と呼ぶ。その原因菌は、*Actinobacillus lignieresii* であり、この菌は口腔内に常在しているため口腔粘膜の創傷部から動物体内へ侵入し、病変は深部で進行する。

今回の症例2は、舌の病変は木舌には至っておらず、舌全体の柔軟性を有していた。仮に舌の深部のみで病変が進行していた場合、触診しても病巣に気付かぬケースもあり、と畜検査時に十分な舌の触診の徹底が肝要である。